

主は富んでおられたのに

第二コリント八章六く九節

小倉義明

へーテキスト

(1) テキストは、使徒パウロのコリント教会の人々に向けて語った献金の奨めである。献金の奨めの根拠として、パウロは「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた」と、イエス・キリストの受肉の事実を挙げている。

(2) このテキストから、三つの点を学び得るであろう。

① 献金の根拠として、イエス・キリストの事実を挙げている点。即ち、キリストにおいて神が何をなして下さったかという神の事実から、人間のどう生きるべきかという規範や模範を導き出していることだ。このよ
うな神の光に照らされて人間の生を考える思惟の構造または方法 *Denkweise* は、献金の奨めにおいてだけでなく、人々の分派抗争や不品行への戒めや、もつと積極的には、節制・奉仕・礼拝の守り方・復活信仰の望みなどの教えのすべてにわたって見出されるパウロの特徴である。

② イエス・キリストの受肉の事実を、「主は富んでおられたのに……貧しくなられた」という表現で言い表わしている点。これは、さしあたり「献金の奨め」という主題に合わせて、選びとられた表現であろう。そこに、事柄に即し、相手が理解しやすいように語るパウロの心遣いが見てとれるのではないか。パウロ書簡に見られる彼の用いる語彙の豊かさや引き合いに出す事例の斬新さとは、パウロの相手に対する配慮の所産であると言えるのではないか。

③ テクストから私たちが学びたい第三の点は、「主に富んでおられたのに、貧しくなられた」とパウロが言い表わしているキリストの受肉の事実そのものの理解について、である。パウロがピリピ人への手紙で言っている表現を参照してみよう。

「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた」(二章六節)
即ち、神が人となり給うたというクリスマスの出来事を指しているのである。

〈Ⅱ〉降りてくる

(1) 犬養道子女史は、かつて『中央公論』に「フリブル日記」を1年間にわたって連載された。その中の一節、一九七九年十二月二十四日の日記に、彼女はこのような書きつけている。

「夜、聖心女子大学チャペルでクリスマスのミサ。至高なる存在が人を助けるため、至福を出て来て下さった祝日。それなら、われらも安逸と己れを出て、前へ。最も不幸な兄弟たちのもとへ。」

(2) 大木英夫博士の神学において、〈超越〉の概念の転換は、極めて重要な要素であると思う。大木先生は、こう述べておられる。

「神の超越とは、何でしょうか。それは人間の超越とは異なります。人間の超越は、自分を超えて出て、神のごとくならうとします。人間を限りなく、非人間的にします。しかし、神の超越は、神がはるかに人間のもとに超えてこられるという超越であります」(『ローマ人への手紙』まえがき)

これは、瞠目すべき把握である。

神の超越とは、人間とのはるかな距離を言うのではなく、その距離を乗り越えて人間のもとにまで到達する愛の力なのである。こうした言い表わしは、根源的な事柄、従って通常の眼では見えにくい事柄を、鮮やかなイメージとして生き生きと伝えてくれるのである。

〈Ⅲ〉わからせる

(1) 以上、私たちはテキストを通して、神についての深い事実を、新鮮でしかもわかりやすく解釈し説明することの意味を、〈相手のもとにまで出てゆく〉在り方として考えてきた。これらの事柄を「教育」の務めに召されている者として、なおしばらくその含蓄を味わってみたいと思う。

(2) ある年の高校の卒業祝会のことであった。第一部の礼拝が終わり、第二部の愛餐会に移った時、アナウンサーが入った。「生徒さん方の御依頼により、料理について説明申し上げます。」と、高い帽子をかむったホテルの総料理長さんだ。こうして、この日のフランス料理のコースはお皿が運ばれてくる度に、総料理長さんの説

明が加えられたのである。

お料理というものが料理人によっていかほどに入念に考えられ、かつ調理されているかを、私は説明を聞いてみて深く納得した。説明を聞かされ、わかってみて、料理の味が一層味わい深くなるのであった。

総料理長さんの説明を聞きながら、私は考えた。「教育とはシエフの説明のようなものだ。説明を加えられることによつて、生徒たちは、事柄の意味深さに気づくようになる」と。

教育とは、説明・解説・解釈・翻訳によつて、学生の心の眼が開かれるのを手伝うことではないか。学業とは、教師の解説や解釈によつて、わかつていなかった事柄がわかり出し、感動して、こんどは自らそうした解説や解釈ができるようになってい、と希望すること、ではないか。

(3) 「わからせる」には、学生のもとまで下りてゆかなければならない。相手の理解力・関心興味・感情をも汲みとりつつ、彼の生活の座において理解・納得するのを助けるのである。

もう一つ、中学高校での経験を申しあげたい。一昨年は女子聖学院は創立百周年であった。記念行事として待降節に Zsigmond Szathmáry 教授を招いて、オルガン・コンサートを開催した。教授は、ヨーロッパ屈指の演奏家である。その教授に、演奏曲目の中に中学生でもわかる曲を一、二加えてほしいと、私は頼んだ。すると、サットマリー教授は、バッハ、バルトーク、リストやコダーイの曲の中に、「一輪の薔薇が咲いて」を加えて下さった。これは、ドイツの古いカロルだが、讚美歌 # 86 “エサイの根より生い出でたる” となつて、中学生でも知っている曲である。

しかも教授は、「創立百周年おめでとうございます。お祝いのささやかなプレゼントとして、クリスマスと共に喜ぶという意味も込めて、皆さんが楽しんで頂けるものをお贈りしたいと思います」というメッセージ

きで、コラール変奏曲に仕立て上げて演奏して下さった。よく知っている主旋律が、万華鏡のように様々な調べとなって変奏されるのを聞いて、中学生が喜び感動したのは、申しあげるまでもない。

(4) 「わからせる」ということは、相手の理解力や生活感情にまで降りてゆくことだ、と言った。しかし、それは、真理を真理以下のものに値引きすることではない。真珠のネックレスに代えて、プラスチックのまがいものを与えるのではない。真珠の真正性を失うことなく、それを学生・生徒にふさわしく仕立上げるのだ。サットマリー教授は、それをやった。教授は、卓越した演奏家であると共に、愛情に満ちた教育者でもあると言えよう。

〈結〉

(1) 大学教授の偉さは、大木英夫先生の「超越論」にならつて申すならば、学生との距離において見出されるべきでなく、その距離を乗り越えて学生たちの間に入ってゆく愛情にこそ存するのではないだろうか。学生のもとにまで出て行くこと、彼らの側に寄り添ってあげること——このような在り方こそ、「聖学院教育憲章」が宣言した「サーヴァント・リーダーシップ」なのではないか。

(2) 私たちは私たちが提供するよう期待されている学問や技芸や実務のうち、〈最高〉のものを、学生たちの現実に即した〈最上〉の形で提供したいと思う。

このような志を、私たちは「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた」という神の愛の事実から、引き出されるのである。

「主は富んでおられたのに」

今年も託された尊い教育のわざを、愛情と献身の思いをこめて遂行し、主の御足の跡を歩んでゆこうではないか。

二〇〇七年一月八日 新年教職員研修会開会礼拝

聖学院キリスト教センター所長